

磐余いわれの諸宮とその時代

京都教育大学
名誉教授

和田 萃

一 はじめに

平成二十三年（二〇一一）十二月十五日、榎原市教育委員会により、榎原市東池尻町の「大藤原京左京五条八坊」の発掘調査成果が発表された。榎原市東池尻町の小字「嶋井」に堤状の地形があり、発掘調査の結果、古代に築造された池の堤であることが判明し、人口に膾炙する大津皇子の辞世の歌、「ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ」（『万葉集』巻三―四一六）にみえる、磐余池の堤である可能性が大きい、との内容であった。

全国的に大きな反響があり、十七日・十八日に実施された発掘調査現場の見学会に、全国から約二千人の参加があったと聞く。今もなお、大津皇子の悲劇に同情を寄

せる人たちの多いことを、改めて知った次第である。

発表前に何度か発掘調査現場を訪ね、調査担当の平岩欣太氏からいろいろ説明をうかがった。また二〇一〇年の冬にも今回の発掘調査地点の北側で、同じく濱口和弘氏により発掘調査が行われ、その折にも見学したが、分厚い版築層が検出されていた。今回の発掘調査現場は、前年調査地の南方域に当たっている。

磐余池については思い出がある。四十年前前のこと、『史林』第五十二号に「殯の基礎的考察」を発表して少し後、奈良県立榎原考古学研究所（榎考研）の泉森 皎さんから、『池之内古墳群』の報告書に、古代史研究に立脚した論文執筆の依頼を受けた。それ以前のこと、昭和四十一年一月か

らほぼ三年間、恩師の岸俊男先生（当時、京都大学文学部助教授）指導のもと、榎考研で藤原宮跡から出土した木簡の整理と積読、概報や報告書の執筆、藤原宮域の画定などの作業に従事した。そうした経緯があるので、爾来、榎考研は私の古代史研究の重要な拠点となっている。

泉森さんからの執筆依頼を受け、桜井市池之内とその周辺地域を何度も歩いていくうちに、榎原市東池尻町の南方域やすぐ東の桜井市池之内の西方域に、広大な池跡の所在することに気づいた。とりわけ御厨子観音のすぐ東方、東池尻町小字嶋井の場所が堤状であり、丹念に観察していると、その西端断面が版築層であることを見いだし、人工的な堤であることを確信した。

その後、桜井市役所・榎原市役所・榎原

法務局で、桜井市池之内や檀原市東池尻町周辺の地籍図を閲覧して小字名を確認し、また古代から近世に至る史料を博搜して、論文「磐余地方の歴史的研究」を執筆、昭和四十八年三月三十一日に発行された奈良県教育委員会『磐余・池之内古墳群』に収載された。その論文の骨子は、今回、発表された発掘調査の所見とほぼ一致している。

四十年前も前に発表した論文が、この度、陽の目をみるとは思いもしなかったから、研究者冥利に尽き、家で祝杯をあげたことである。

二 磐余の諸宮

まず史料にみえる磐余の諸宮の所在地をみよう（別表参照）。

『日本書紀』にみえる神功皇后の稚桜宮なごののみやはともかくとして、履中天皇については、記紀ともに磐余稚桜宮と伝えており注目される。

『古事記』履中天皇段では、冒頭にイザホワケ王（履中）は「伊波礼（磐余）若桜宮わかざくらのみやに坐し、天の下治らしめしき」とみえるが、記載内容の大半は、墨江中王の反逆と「近飛鳥」ちかひつ「遠飛鳥」とほつの地名起源伝承に終始

し、文末に若桜部臣らに若桜部の名を賜い、また伊波礼部を定めたことがみえるにすぎない。

一方、『日本書紀』には、磐余稚桜宮と磐余池に関わる有名な伝承がみえている。

仁徳天皇々々のイザホワケは、元年二月に磐余稚桜宮で即位した。履中天皇である。二年十一月に磐余池が作られた。翌三年十一月、履中は両枝船を磐余市磯池いしほの池に泛べ、皇妃の黒媛（葛城襲津彦の孫娘）と分乗して遊宴した際、膳臣余磯が酒を献じたところ、桜の花びらが履中の盞さきに入った。時ならぬ桜の花だったので、履中は長真膽連まいのむらじに命じて何処から飛来した花なのか訪ねさせたところ、掖上の室山むろやま（御所市大字室の宮山古墳付近）で見出し、その桜の枝を献じた。喜んだ履中は、それに因んで磐余稚桜宮と名付けたという。

この伝承は、磐余稚桜宮の宮号の由来と共に、葛城の室山からの花の飛来は、黒媛が葛城氏の出身であり、さらには磐余市磯池が葛城氏により造営された可能性をも伝えている。

なお両枝船については、『古事記』垂仁天皇段に、尾張の相津あひつにある二俣榎ふたまたなぎを二股

小舟に作り、倭やまとの市師池いちしのいけや軽池かるのいけに浮かべ、垂仁がホムチワケ王を連れて遊んだ伝承との類似性が注目されよう。また履中三年十一月条の磐余市磯池が、二年十一月条にみえる磐余池と同一なのか否か、問題を残す。桜井市池之内の集落東側にも、古代に遡る可能性のある、小さな池の所在した痕跡が存在するからである。

雄略天皇崩御後、その子の清寧が即位する。清寧天皇の宮について、『古事記』では伊波礼甕栗宮いみかくりのみや、『日本書紀』には清寧元年正月に壇場を磐余甕栗に設けて即位し、宮を定めたとみえる。磐余甕栗宮については、十四世紀後半に著された『帝王編年

磐余の諸宮

天皇	古事記	日本書紀
（神功皇后）		磐余（撰政三年条）稚桜宮（六十九年条）
履中	伊波礼若桜宮	磐余稚桜宮
清寧	伊波礼甕栗宮	磐余甕栗宮
継体	伊波礼玉穗宮	磐余玉穗宮
敏達	他田宮	百濟大井宮 譚語田幸玉宮
用明	池辺宮	磐余池辺雙槻宮
舒明		百濟宮

記』に、「大和国十市郡白香谷」とするが根拠は不明。桜井市白河は初瀬山の南中腹に位置し、磐余の地とは遠く隔たる。享保二十一年（一七三六）に成った『大和志』では「池内御厨子邑」とし、橿原市東池尻町の御厨子観音近くに想定されていた。

六世紀初頭に武烈天皇で皇統が絶えた際、越前にいた男大迹王が大伴大連金村によつて擁立され、河内の樟葉宮（大阪府枚方市楠葉）で即位した（『日本書紀』）。継体天皇である。その後、継体五年（五一二）に山城の筒城宮、同十二年三月に弟国宮に移り、継体二十年（五二六）に至つて磐余玉穂宮に遷つた。継体の大和入りを阻む勢力が存在したことを示している。『古事記』では、品太王（応神天皇）五世孫の袁本杼命（継体）の宮を伊波礼玉穂宮と記し、『日本書紀』にも磐余玉穂宮とみえる。磐余玉穂宮の所在地は、桜井市池之内周辺とされるが未詳。

敏達天皇の百済大井宮・譚語田幸玉宮にふれよう。欽明天皇崩御後、敏達は元年（五七二）四月に即位して百済の大井に宮を営み（百済大井宮）、敏達四年（五七五）に譚語田幸玉宮に移つた。百済大井宮の所

在地については、かつては河内国錦郡百濟郷（大阪府河内長野市太井）や奈良県北葛城郡広陵町百済の地とされていたが、舒明天皇の百済宮の項でふれるように、現在では桜井市吉備の地であることが確定した。譚語田幸玉宮については、『古事記』に他田宮、天寿国繡帳に乎沙多宮、『日本靈異記』上巻の第三縁や『帝王編年記』には、磐余譚語田宮とみえている。

譚語田幸玉宮の所在地は、桜井市戒重の春日神社を中心とした一帯とみてよい。大字戒重の小字「和佐田」は、明治以前には「他田」であり、春日神社はかつて「他田（長田）宮」と称されていた。平安時代の東大寺文書に「他田庄七町二八〇歩」とみえ、その中心は大和国条里の路東二十四条六里であり、大字戒重を中心とした一帯である。また小字「和佐田」の南に小字「蔵殿」があり、譚語田幸玉宮の大蔵・内蔵に由来する可能性もある。

集落の東北で寺川と栗原川は合流し、ここには「幸玉橋」が架けられ、集落の南側に集会所「幸玉会館」がある。以上のことから戒重の春日神社一帯が、敏達天皇の譚語田幸玉宮の地であることはまず動かな

い。

そしてまた同地は、後に大津皇子の譚語田舎が営まれたことも十分に想定しうるだろう。飛鳥から大官大寺跡をへて磐余池の東側を通れば、検出された池の堤から戒重までの直線距離は、約二・五キロほどにすぎない。

用明天皇の宮について、『古事記』には池辺宮とのみ記す。『日本書紀』では、敏達十四年（五八五）八月十五日に天皇崩御、同年九月五日に用明が即位し、磐余に池辺雙槻宮を造つたとみえ、また『法王帝説』にも、伊波礼池辺雙槻宮とみえる。磐余諸宮の宮号をみると、用明の場合にのみ、「磐余の池の辺の雙槻宮」と表記されており、「磐余池」の辺に峙つ雙槻のもとに、宮が営まれたことを示している。磐余池が用明朝に所在していたことは明白であるが、いつ造られたのか、履中朝まで遡るのか、今後の検討課題となる。

崇峻天皇の宮については、『古事記』に倉椅柴垣宮、『日本書紀』に倉梯宮とみえる。倉橋（桜井市倉橋）は寺川上流右岸の地だから、厳密には磐余ではない。ただし『上宮聖徳法王帝説』では、崇峻の石寸（磐余）

神前宮を伝えており、神前倉人の存在が確かめられるので、倉橋の地とは別に磐余に神前宮が所在した可能性もある。

推古三十六年（六二八）三月七日に、推古天皇は飛鳥の豊浦宮で崩御し、翌年（六二九）正月四日に、敏達天皇の孫である田村皇子が即位した。舒明天皇である。その場所は明らかではないが、舒明二年（六三〇）十月に飛鳥岡本宮に遷った。近年、飛鳥京跡の最下層で、飛鳥岡本宮の遺構が検出されている。

舒明八年六月に飛鳥岡本宮が火災したので、田中宮（橿原市田中町付近）に遷り、十一年七月から百済川の辺を宮處と定め、百済宮と百済大寺の造営が開始された。同年十二月に伊豫温湯宮に行幸。十二年四月に伊豫から戻り、廐坂宮（橿原市丈六付近）に入った。同年十月に竣工成った百済宮へ遷るが、十三年十月に百済宮で崩御した。

舒明天皇の百済宮と百済大寺の所在地については、私が大学院に進学した頃には、北葛城郡広陵町百済の地とするのが定説であった。しかし「殯の基礎的考察」を執筆中、高市皇子が薨去した際に柿本朝臣人麻呂が献呈した殯宮挽歌（『万葉集』巻二一



磐余池跡周辺位置図

一九九)を分析して、百済宮や百済大寺は藤原宮に近い所に所在していたのでは、と考えるようになった。藤原宮跡近くに小字「百済」があり、高市皇子の柩を、香具山宮から「百済の原」を通って城上宮へ運んでいること、壬申の乱に際し、大伴連吹負が「百済の家」を出て飛鳥古京の留守司を襲撃しているからである。

その後、桜井市吉備で吉備池廃寺が検出され、舒明朝に造営された百済大寺であることが判明した。なお城上宮については、桜井市橋本付近に想定され、同地の青木廃寺跡から長屋王邸出土と同範の瓦が見つかっている。

舒明が晩年になぜ百済大宮と百済大寺を造営したのか、その背景はよくわからない。祖父の敏達が、磐余に百済大井宮と譯語田幸玉宮を造営したと、密接に関わっていた可能性がある。

三 磐余の範囲

記紀にみえる磐余の諸宮を検討したが、古代に磐余と称された地はどの範囲を指すのだろうか。まことに難しい問題であり、ここでは目下、思いつくことを述べるにと

どめる。

『日本書紀』の神武即位前紀に、「夫れ磐余の地の旧の名は片居、亦是片立と曰ふ」とみえる(己未年二月二十日条)。片居や片立は、緩やかな傾斜地を意味するかと思われるので、低丘陵の続く香具山北東麓を指すとみてよい。

手がかりになるのは、用明二年(五八七)四月二日、用明天皇が磐余の河上で新嘗を行ったとみえることである(『日本書紀』)。新嘗祭祀の最中に用明は発病し、磐余池辺雙槻宮に戻った。後のことになるが、天武七年(六七八)の春にも齋宮を倉梯の河上に建て、同年四月七日に天武天皇が百寮の人々を従え行幸に出立し始めた際、天武と額田王との間に生まれた十市皇女が宮中で急死する事態が生じ、行幸は中止された。磐余河と倉梯河は同じであり、現在の寺川を指す。したがって磐余の諸宮の時代から天武朝に至るまで、寺川の上流域で新嘗などの祭祀が継続して実修されていた可能性があり、磐余と呼ばれた範囲の南東隅だった可能性が大きい。

寺川の呼称は近世に生じたもの。多武峯に多武峯寺があったことによる。古代では

倉梯河と称され、『万葉集』にもみえてい(巻七一・二八三・二八四)。磐余河の史料は、管見の範囲では右のものだけで、より古い呼称だった可能性がある。

多武峯から流れ下る寺川は、桜井市谷の東光寺山(標高一二六・五メートル)を過ぎる辺りで西北西方向へ大きく屈曲し、耳成山北方の檀原市十市町付近で、桜井市高家から流れ出る米川と合流する。磐余の範囲を厳密に画定することは難しいが、おおよそ寺川左岸の香具山東北麓を指す。目下の私案にすぎないが、より具体的には、寺川上流の倉橋付近から、東光寺山、桜井市戒重の幸玉橋、耳成山、香具山を順に結んだ範囲内としておきたい。

その範囲内でも磐余の中核地域は、奈良盆地を東西に走る古道、横大路の前身である「プレ横大路」に沿った一帯や、その南方域を流れる米川沿いの地域だったとみてよい。桜井市橋本・吉備や檀原市膳夫町付近を流れる米川は、古代には「百済川」と称されていたことが注目される(「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」。百済から渡来した人々が数多く居住したところから、生まれた地名であろう。

四 プレ横大路の歴史的意義

磐余の範囲を推定したが、磐余の北東域や西方域をも含めて巨視的にみると、いくつか注目すべきことがあるように思う。磐余の北東域は磯城（師木）嶋と称され、欽明天皇の磯城嶋金刺宮が所在した。磯城嶋の呼称は、北に三輪山の麓を巡って初瀬川（河川法では大和川）が流れ、南に粟原川が西流して、あたかも嶋状を成すところから生じた。

延久二年（一〇七〇）の「大和国雑役免坪付帳」（『平安遺文』に所収）によれば、城上郡に興福寺領の「城嶋庄十二町三反」がみえ、路東条里の二十三条六里と、少し東に離れた八里の二カ所に雑役免田が所在した。桜井市慈恩寺の小字「式嶋」は、『奈良県条里基本図』によれば、二十三条六里の三・四・九坪にあたるので、小字「式嶋」の一带に磯城嶋金刺宮が所在したとみてよいが、その北東部には初瀬川の氾濫痕跡がある。

また桜井市脇本で検出された脇本遺跡は、路東条里の二十三条八里に位置し、五世紀後半の建物遺構が検出されており、雄

略天皇の泊瀬朝倉宮の可能性が大きい。稲荷山鉄剣銘文にワカケル大王（雄略）の「斯鬼宮」がみえ、雄略と欽明はともにシキ（斯鬼・磯城）の地に宮を営んだのである。なお脇本遺跡では、六世紀後半、七世紀初頭前後、七世紀後半の大型建物遺構も検出されており、五世紀後半以降、初瀬谷を押さえる要の地であった。

推古朝に横大路が敷設される以前に、その前身とも言うべき道幅の狭い「プレ横大路」が、ほぼ同位置に所在した可能性が大きい。東からみると、初瀬谷西端部に雄略の泊瀬朝倉宮、磯城嶋に欽明の金刺宮、プレ横大路沿いに右にみた磐余の諸宮、西方には安閑の勾金橋宮（橿原市金橋）などが所在した。東西の軸線に沿って諸宮が所在し、神崎倉・蘇我倉・当麻倉など、大和政権の屯倉も設置されていたのである。

記紀にみえる歴代王宮の所在地は、成務・仲哀や仁徳・反正の事例を除けば、ほぼ大和に伝えられており、実質的な初代王、ミマキイリヒコ（崇神）以降の王宮の所在地をみると、石上や軽・飛鳥周辺を除けば、三輪山周辺とプレ横大路沿いに限られる。おそらくその背景には、プレ横大路から河

内・摂津に至り、河内湖周辺の津や大阪湾岸の住吉津・難波津に直結していたからに他ならない。五世紀後半になると、大伴・物部・蘇我・阿倍氏などの有力豪族が、河内や摂津にも拠点をもつに至ったことと深く関わっている。

以上、磐余の範囲や諸宮について、考える所を述べた。近年、国道一六五号線沿いの開発が著しい。しかしその南方域の景観は、私が四十年前に踏査を重ねた頃と余り変っていない。飛鳥では、昭和四十七年（一九七二）三月に高松塚古墳から壁画が発見されたことを契機として、国・奈良県・明日香村の三者による発掘調査が急速に進み、数多くの大発見が続いて、飛鳥の諸宮の時代については、かなりの見通しが得られるようになった。

今後、日本古代の国家形成を考える場合、磐余に諸宮が営まれた、六世紀代の解明が必須となるだろう。磐余地域の景観や環境は、幸いにして目下のところ、よく保全されている。磐余地域の保全とその歴史的解明は、国家的急務と言わねばならない。識者の御尽力を願って止まない次第である。